

ページ	原文論点	解題	スミス・諸国民の富
293	<p>・スミスは、固定資本に対する流動資本については、その対立をなす固定資本とは異なり生産物の価値から全部的に補填されねばならず、生産物の諸変態に全部的に参加しなければならない生産資本構成部分に他ならないということは指摘されていない。</p> <p>むしろそれは、資本が生産部面から流通部面への移行に際して、商品資本および貨幣資本として採る態様と混同されている。しかし、この両形態、商品資本と貨幣資本は、生産資本の固定的構成部分の価値の担い手であるとともに、流動的構成部分のそれでもある。いずれも生産資本にたいする流通資本であるが、固定資本にたいする流動資本ではない。</p>	<p>生産資本構成部分— $W(P_m + A)$ P_mは、価値の部分的移転・補填(固定資本)と、価値の全部的移転・補填(流動資本)で構成される。</p> <p>スミスは生産部面での生産資本(固定資本と流動資本)の区別を、流通部面での商品資本・貨幣資本への転嫁形態で、とらえ混同する。</p> <p>生産部面での生産資本(固定資本と流動資本)は流通部面においては流通資本(商品資本・貨幣資本)の形態をとっている。</p>	<p>岩波文庫(2)</p>
294	<p>・スミスは「利潤が固定資本によって得られるには固定資本が生産過程に留まるからであり、流動資本によって得られのは生産過程を去って流通させられるからである」と全く間違った説明によって一可変資本と不変資本との流動的構成部分とが回転においてもつ形態の同一性のために、価値増殖過程と剰余価値形成における両者の本質的区別が隠蔽され、資本主義的生産の全秘密がますます不明にされる。</p> <p>・この本質的区別は廃棄される。その後の経済学はさらにこれを進めた。すなわち、可変資本と不変資本との対立ではなく、固定資本と流動資本との対立が本質的なものであり、唯一の区別の仕方であると固執された。</p>	<p>・VとCの流動資本の構成部分が回転においてもつ生産物商品形態での同一性(流動資本の前面価値移転)—生産資本から商品資本、流通資本に移行する使用価値の同一性(原料から完成品の使用価値)により— VとC(流動資本部分)の本質的区別は隠される。</p> <p>・不変資本と可変資本の対立(区別)を、固定資本(機械・工場など)と、流動資本(原料、労働対価)の使用価値の対立としてとらえる。</p>	
294.7 行目	<p>・スミスは「いかなる固定資本も流動資本によることなしには、収入をもたらさない。いかに有能な機械や仕事用具でも、それが使用されるための材料とそれを使用する労働者の生活手段とを供給する流動資本がなければ何も生産しない」と両資本部分が生産物形成者であると言い、例</p>		

295	として農業者の家畜や種子の例で、固定資本、流動資本の観念が説明。	
-296	農業と家畜飼育の固定資本と流動資本	
297	<p>・スミスは、米(原料および補助材料の流動資本)が、(1)一方はその態容を保持することにより、他方はその態様を失うことにより、所有者に利潤をもたらすという全く不適當な利潤規定を持ちこむことによつて、</p> <p>(2)労働過程における諸生産要素の一部分の変化を、生産物交換すなわち商品流通に属する形態転換(買いと売り)と、すなわち同時に流通商品の所有転換と、混同している。</p>	<p>(1)使用価値の原料から完成品へ</p> <p>(2)労働過程における生産資本から、流通過程の商品資本へ</p>
298	<p>・スミスは、固定資本となる諸物を素材的要素で数え上げ、流動資本の諸物を数え上げているが、同じものでも、労働過程での機能によつて流動資本にも固定資本にもなりうる(間違い)。</p>	
300	<p>・スミスは、生産資本(生産的形態における資本)にかんしてのみ当てはまる生産資本の固定的構成部分と流動的構成部分との区別を、生産資本と流通過程にある資本に属する諸形態である商品資本および貨幣資本の区別と混同している。</p> <p>それは「流動資本は、・・・それぞれの商人の手にある各種の生活手段、材料、および完成品と、それを流通させ分配させる等のために必要な貨幣とからなっている」といっている。ここでは前述と反対に、再び流動資本が、商品資本および貨幣資本と、すなわち全然生産過程には属せず、固定資本に対して流動資本をなすのではなく、生産資本にたいして流通資本をなす二つの資本形態と同一視されている。</p>	<p>P生産資本 P m 固定的部分と流動的部分</p> <p> ↓ 混同 (機械・工場) (原料・熱)</p> <p>流通資本 完成品 商品資本 Wと貨幣資本G</p>
301	<p>・スミスは「社会の総資本が分割される三つの部分のうち、第三の最後のものは流動資本であり、その特徴はそれが流通または持ち主転換によつてのみ収入をもたらす。これも四つの部分から成っている。1.貨幣、2.食料、3.生産材料、4.完成製品で、1は貨幣資本、2、4は生産物とし</p>	

て生産過程から突き出されていて、売られねばならない生産物。

これらの生産物は、今では商品として商品資本として機能する。それらは生産資本の何らの要素をなさない形態をもち、過程における位置を占めている。これらの生産物は、第二では食糧であり、第四ではその他のすべての完成生産物、それ自体また完成労働手段みからなる生産物である。

304 ・混乱は、それらが一部は**生産者の手中で機能するもの**と解され、他方では、それらがそこでは単なる商品資本であって、生産資本の構成部分ではない、**商人の手中で機能するもの**と解されているという点に表れている。

305 ・最後に注意をひくのは、A・スミスが流動資本の構成部分を枚挙するときに、労働力を入れていない。しかもこれは二重の理由からである。一つは、労働力は市場で流通している間は資本でない。労働者は、自分の肉体（労働力）という商品を市場に持っていき、それが生産過程に合体されたときに資本の構成部分となる。スミスは**流通部面では資本でない労働力を、彼のいう流動資本に入れることが出来なかった。もう一つは、彼は「習得された有能な諸能力を固定資本の部類に入れていたため流動資本に入れることが出来なかった。**

307 ・スミスの新たな混乱
・スミスは「流動資本(商品資本と貨幣資本)の4つの構成部分のうち、3つ(食料、生産材料、完成製品)は、年々又は長い機関に流動資本から引上げられ、固定資本または直接的消費のために準備された在 high に繰り入れられる。全ての固定資本・有用な機械や仕事用具は、元来は流動資本(材料と労働者の生活手段を供給)から出ており、たえず流動資本によって維持される。」と言う。
・マルクスは、「すべての生産物は商品として市場に現れ、資本家にとって商品資本として流通、その生産物が生産資本(生産手段)の固定的要素または流動的要素として機能するが、それとも個人的消費の手段として役立つかは、問題でない。すべての生産物は商品として市場から引き上げられることはわかりきったことである。このことは、生産資本の固定的要素にも、流動的要素にも、あらゆる形態の労働手段にも労働材料にも等しくあてはまる。

308 ・機械は綿花と同様に市場で買われる。しかし、このことからすべての固定資本が、元来は流動資本から出ていることにはならない」それはス

生産資本 P (P m + A 価値移転する固定および流動資本)から商品資本W(完成製品・生産物)の使用価値形態へ

流動資本と固定資本の規定の混乱

ミスが流通資本（商品資本、貨幣資本）と流動資本（非固定資本）とを混同しているからであると批判している。

309 ・さらに、スミスの「それらの生産物は、これらの資本のみでなく、社会にあるすべての他の資本をも、利潤を伴って補償する」という部分を批判し、それらの生産物は、すべての他の産業部門のために原料、補助材料等を供給する。しかし、それらの生産物の価値はすべての他の社会的資本の価値を補填しない。この価値は、それら自身の資本価値を補填するだけである。

310 ・紡績機械は紡績に使用されないならば、生産資本の固定的構成部分として機能しないならば、全く使用価値をもたない。しかしそれは生産された国から輸出され原料その他と引き換えに売られることができる。しない。

・土地と合体し位置を固定された生産物、工場建物、鉄道、橋、トンネル、船きょう、土地改良等は輸出できない。無用であるか売られるかどちらかである。これらの物は資本家の商品資本か、スミスによれば流動資本の形態である。しかし、社会的にみれば、国内で固定された生産過程で固定資本として機能せねばならない。スミス流に言えば、それらは売ることによって利潤を売る。すなわち流動資本。それらの最終の買い手は、それらを生産過程で使用することによってのみ利用できる。すなわち固定資本として。

・船や機関車は、その運動によってのみ作用する。その生産者にとってではなく、その使用者にとっては固定資本として機能する。

312 ・スミスの文章のなかで注意すべきは、「機械等を作る労働者の生活手段を供給する流動資本」という文句である。

・重農学派にあっては、労働が生産物に付加する価値部分は、不変資本の生産物に付加する価値部分と同様に、労働者に払われて労働力として値に等しい。不変資本と可変資本との差別を発見することは彼らの学説そのものによって阻まれている。

・剰余価値を生産するものが、労働であるならば、それは工業においても、農業におけると同様に剰余価値を生産する。しかしこの学説は、農業においてのみ労働は剰余価値を生産、剰余価値は労働からではなく、農業部門における自然の特別な活動(助力)から生ずることになる。

313 ・スミスが、労働者の生活手段を固定資本にたいする流動資本として規定するのは、(1)固定資本に対する流動資本を、流通面に属する属する資本の諸形態と、すなわち流通資本と混同するからである。それはスミス無以降無批判に相伝された混同である。(2)前貸しされた資本は、生産資本に転嫁され、生産要素の形態をとり、それ自体より以前の労働の生産物である(労働力も含まれる)。前貸し資本は生産過程の内部で機能する。

・もし資本の可変部分の転化された労働力のかわりに、労働者の生活手段を置くならば、この生活手段そのものが、価値形成の点では、生産資本の他の諸要素・原料・また役畜の生活手段から区別されない。スミス

生産過程における固定資本に対立する流動資本と
流通過程における流通資本(商品資本、貨幣資本)の規定

生産資本 P (P_m固定資本と流動資本+A)
 価値の部分移転と全移転 非完成生産物
 流通資本 商品資本Wおよび貨幣G 完成生産物
 前貸し資本 貨幣資本－生産資本(P_m+A)－商品資本

314 は重農学派に倣って、他の諸要素し労働者の生活手段を同列に置いている。

- ・生活手段はみずからその価値を増殖、剰余価値を付加することはできない。生活手段の価値は、生産資本の他の諸要素の価値と同じく、生産物の価値のうちに再現できるだけである。

原料、半製品と同様、生活手段が、労働手段から成る固定資本と区別されるのは、生活手段は形成される生産物に全部的に消費され、その価値は全部的に補填されねばならないが、固定資本の場合には、ただ漸次的に部分的にのみ行われる。

- ・かくして、いまや労働力(または労働者の生活手段)として前貸しされた生産資本部分は、労働過程および価値増殖過程にかんれんしてではなく、ただ素材的にのみ、生産資本の他の素材的要素から区別される。
- ・労働賃金に支出された生産資本の流動的部分が、原料等の対照的生産物形成者の一部分と共通に流動性をもつということは、資本のこの可変部分が不変部分に対立して価値増殖過程において演ずる役割とはなんら関係もない。
- ・前貸し資本のこの部分は、流通を介して生産物の価値から補填され、再生産されねばならないか、に関するだけである。労働力の購買と再購買は、流過程に属する。しかし生産過程の内部において初めて、労働力に支出された価値は、資本家にとって、一定の不変量から一つの可変量に転化される。

315

- ・しかし、スミスのように労働力に支出された価値が生産資本の流動的構成部分として規定されるのではなく、労働者の生活手段に支出された価値がそれとして規定されることになると、可変資本と不変資本との理解、資本主義的生産過程一般の理解は不可能になる。
- ・生産物形成者に支出された資本、不変資本に対して、可変資本であるというこの資本部分が、回転に関しては生産資本の流動的部分に属する、という規定のもとに埋没される。労働力のかわりに、労働者の生活手段が遺産資本の要素として数えられることによって、埋没は完全にされる。

316

- ・スミスによって、流動資本なる規定が労働力に支出された資本価値の決定的なものとして固定されたことは、彼の後継者たちが、労働力に支出された資本部分を可変資本として認識することを不可能にした。

・労働力(または労働者の生活手段)は、生産資本(固定資本と流動資本)の中の、流動資本(原料など)の素材的要素として並列して区別される。